

北九州市地域福祉計画推進懇話会(第1回) 会議要旨

1 開催日時

平成28年8月23日(火) 18:00~20:15

2 開催場所

北九州市役所 3階 大集会室

3 出席者等

(1) 構成員

村山座長、田代副座長、石丸構成員、磯田構成員、占部構成員、角見構成員、小松構成員、城田構成員、徳丸構成員、中間構成員、西村構成員、芳賀構成員、前田構成員、眞鍋構成員、渡邊構成員

(2) 事務局

保健福祉局長、地域福祉部長、地域福祉推進課長、地域支援担当課長 ほか

4 会議内容

(1) 保健福祉局長挨拶

(2) 座長・副座長の指名

(3) 座長・副座長の挨拶、構成員自己紹介

(4) 議事

① 地域福祉計画の中間フォローアップについて(資料1)

② 計画策定後の法令等制定状況について(資料2)

③ 計画の主な取組内容・課題について(資料3)

5 会議経過及び発言内容

- ・資料1~3について事務局より説明

構成員

- ・地域福祉とは何かということが究極の問題で、みんながわかりやすい言葉で言えたら、それぞれの地域の人たちが自分のこととして動いていけるのではないか。
- ・地域の住民一人一人がどれくらい今の状況を見定めているか、そして、自分のこととしてそこに参加していくか。一般市民の認知度向上と参加度向上が究極の課題ではないか。
- ・地域住民に現状をどのように伝え、「あなたが必要なのです」というメッセージをどれくらい送ることができるか。わかりやすい言葉で伝えていく広報力が必要。

構成員

- ・地域福祉という言葉は、研究者の数だけ定義があると言われている。北九州市では地域福祉をこう位置づけるということを計画の中で表明していく必要がある。
- ・どういう定義をとっても絶対外れないことが、住民が主体的に取り組んでいくものが地域福祉だということ。住民の主体性をどう引き出していくかというところが、一番本質的な

ところである。

構成員

- ・町内会に入っておらず、ひっそり誰とも付き合わずに暮らしている人については、民生委員や社協が取り組まないといけない。一方で町内会に入っていないから知らんぷりという町内会長の意識もどうなのだろうと感じる。
- ・朝市をしている商業施設に高齢者がタクシーで出かけ、買い物を楽しみとしている。ヘルパーに頼むより自分の目で見て買いたいという思いがある。朝市では座るところがたくさんあり、地域の久しく会わなかった人たちに会って、これもひとつのサロン活動だなと感じる。市民センターだけではなく、買い物の場所などもうまくサロンとして利用できるのではないか。
- ・タクシー代を支払える人はいいが、タクシーで来られない高齢者は本当に引きこもってしまうと感じる。

構成員

- ・町内会は任期でどんどん人が変わっていくし、少子高齢化に伴い後退している。持続・継続していくことが福祉であり、地区社協の福祉協力員を福祉の専門家として一人一人育てていくことが必要。
- ・特定健診の受診率の目標は、健康推進員は知っているが、一般の人は知らない。これからは高齢者の健康、認知症予防が大切であり、地域の中でお互い連携しながら取り組まなければならない。
- ・認知症サポーターのように講座を受けたときはいいが、だんだん関心が薄くなっていく。
- ・本当に必要とする人に寄り添った情報の提供が望まれる。

構成員

- ・人口減少の中、支え合いの関係づくり、地域ネットワークへの参画の仕組みづくりに取り組んできたが、地方創生や生活困窮者自立支援制度、介護保険法改正など国の制度が変化しており、自治体として次の施策の検討が必要。
- ・高齢化率が高く、人口が減少している町内は、横の連携がどんどん崩れていっている。細っていくネットワークをどうやって厚くするのが課題である。

構成員

- ・いろいろな施策についての情報伝達は、町内会を通じて行ってきたが、もう限界に来ている。発想を転換して、町内会を通じた情報伝達ではなくて、個人に直接情報を知らせるような施策を今後考えていった方がいい。
- ・講習を受けて認知症サポーターになった人たちの意識が萎えないように、次のステップでこんなことをしてくださいという形で新しい働きかけをすれば、そこから大きなうねりや運動が出てくるのではないか。

構成員

- ・小学校で自分たちのまちの課題やニーズを勉強していくことが大切。家庭に子供が持って帰って「今日こんな習ったよ」と言うと家庭の教育にもなる。
- ・吸収力のある小学校3・4年の時に高齢者や障害者の生活を実際に見せていくことが必要。
- ・計画については、成果目標とその達成度を示す必要がある。

事務局

- ・地域福祉計画は、理念、方向性を示す計画であり、具体的な実行計画として高齢者支援計画や障害者支援計画がある。
- ・この懇話会においては、大きな方向性が間違っていないか、取組で足りない部分がないかという視点でご意見をいただきたい。

構成員

- ・認知症サポーター養成講座は、市から社会福祉協議会が委託を受けて実施している。受講者の中には何かしたいという方がたくさんおり、徘徊搜索のサポーターメールへの登録や認知症カフェの運営への協力をお願いしている。
- ・昨年、校区社協のサロン活動は268カ所で実施しており、そのうち36カ所で認知症の方を受け入れている。地域で認知症の方の受け入れは難しいと思っていたが、普段から関わりのある場合は、自然と地域の方で受け入れている。
- ・地域福祉計画を地域の中で実現するために社会福祉協議会の地域福祉活動計画を策定し、取り組みを進めているが、地域福祉活動の担い手がなかなか見つからない。ホームページでの情報発信や出前講演のような形で地域の課題を知ってもらう取り組みをしているが、難しい。
- ・地域の校区社協を中心に活動を進めているが、担い手が不足しており、自治会やまちづくり協議会、民生委員など、いろんな方の協力を得てやっていかないと、地域福祉の課題を整理していくのは難しい。

構成員

- ・校区社協の会長として放課後児童クラブを立ち上げ、福祉の心を育てようと低学年だけでなく高学年も受け入れ、学校の半数の子供を預かっている。
- ・児童委員の活動を通じて、中学生のシンナー撲滅や非行からの立ち直りを支援してきた。そのような中で、子どもたちは成長し、小学校の先生や会社の社長などの立場になって、今度は自分たちが地域のために活動したいと言ってくれている。
- ・子どもたちは地域で育てていく。地域のお年寄りや、家に引きこもらないで、地域家族として子どもたちの先生になればよい。

構成員

- ・計画の基本目標1のところに「地域の一員であることを自覚」とあるが、そういった自覚をする人が今すごく減ってきている。地域の課題に関心のある人と関心のない人の温度差

がすごくあり、自覚のない人に対して今後どのようなアプローチをしていくか。

- ・熊本地震では、周辺の住民が助けてくれたことが多かったと聞いているが、何かあった際は、やはり遠くの友人より近くの他人である。もし何かあったときに、ということを感じてもらいたいような仕組みが大事。
- ・いろんな講座を受けて何か活動したいというニーズがすごくあるが、その辺のマッチングがまだまだうまくいっていない部分がある。生涯学習で学んだことを地域に生かそうと思っても、なかなか活用する場がないという声をよく聞く。
- ・地域福祉に関してマッチングの仕組みを考えていくことにより、今までできなかったこと、ある意味限界だった部分をブレイクスルーするようなヒントに気づけるのではないかな。

構成員

- ・地域福祉の登場人物は、具体的に誰なのか、誰のための地域で、誰のための福祉なのか。
- ・仕事をするために市外から転居し、マンションに住んでいる。マンションの何人かは知っているが、果たして地域の一員と言えるのか。職場やそのほかの関係の中でつながっているが、町内会とか自治会というレベルでみると果たしてどうかと反省も含めて思っている。
- ・困ったときに、困ったとか助けてと言えるような、顔の見える関係をいかに築いていくか。助けを求めることが苦手な人もいるので、そこを共助や公助の部分でいかに補っていくか。
- ・窓口を構えて「来てください」と言うのではなくて、いかにそのような人を積極的に見つけに出向くことができるか。

構成員

- ・地域福祉の担い手として大学生の力をもっと使っていただきたい。北九州市は約2万人の大学生がおり、その中でも地域に関わってみたいという主体性のある学生はいると思う。
- ・全国的に教室の中の講義だけというよりは、実践的な学習、学びを促進していくような動きになっている。
- ・最近の大学生はだめだと言われることもあるが、実際は結構やってくれる。大学生の力を生かすことが担い手不足の解消に役立つし、福祉の人材育成という側面でも役に立つ。大学生に対して開かれた福祉のイメージがあったらいい。

構成員

- ・障害者施設の入所者は、家族、施設内の友達、職員という限られた中でしか、関わりを持つことができない。そこに大学生が普通にボランティアとして参加することで、入所者の価値観、視野を広げるようなお手伝いができる。
- ・昔は目に見えるものが求められていたと思うが、今は、情報という目に見えないものが求められている。しかし、情報はどこまで伝わっているというのがわかりにくく、必要な人に必要な情報が届けられる機関や人が求められている。

構成員

- ・市営住宅に住んでいる一人暮らしの障害者が近所の清掃活動に参加する中で、周りが高齢化してどんどん人が減っていくと、その方自身が頼られるようになり、うれしさを感じると聞いた。特別な事情がなくても、日々接点を持てるのが地域の強みであり、マッチングと出会う場が大事である。
- ・働いている世代にとって職業人としては地域と接点があっても、一個人としての接点は持ちにくい。そういった視点を持つことも必要。

構成員

- ・子供の頃から自分たちは人の役に立つことができる存在であるという教育、してもらう存在から地域のために何か自分たちができることがないのだろうか、という視点を総合的な学習の中に位置づけてやっていくことが必要。
- ・福祉に関する知識が非常に乏しい教員が多いため、中学校区に1人スクールソーシャルワーカーがいると、非常に素早い子供への対応、困っている保護者への対応ができる。

構成員

- ・高齢者の見守りや地域のお祭り、清掃活動などがしっかりできている北九州の地域はすごいと感じる。一方で、これだけ膨大な取り組みを北九州市は行っているが、結構重なっているところもあり、もう少し整理できないか。
- ・市民がホームページを見て、ここに行ったら活動しやすい、ということが分かるような情報の提供の仕方や、一人一人につながるネットのようなものにこれから取り組んで見てもいいのではないか。

座長

- ・それぞれの今のご立場から地域がどう見えているのか、地域の課題が何なのかというところをご発言いただいた。
- ・全体をまとめることは無理であるが、新しい地域との接点、いろいろな人との出会いの場、マッチング機能、そういうものが必要ではないかというのが、大きなまとめではないか。
- ・2回目以降もまた、事務局の報告に基づいて議論を進めてまいりたい。

以上